

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：三品 理絵

研究分野	研究内容のキーワード
近代日本文学	近代日本文学, 泉鏡花, 比較文学, 比較文化, 幻想文学
学位	最終学歴
博士（文学）, 修士（文学）, 学士（文学）	神戸大学文学部文化学研究科博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 高等学校教諭二級普通免許状(国語)	1985年03月31日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 共同研究（国際日本文化研究センター共同研究員）	2002年04月2005年03月	共同研究「日本のモダニズム——関西を中心とした学際的研究」 共同研究「1920-1970の五十年間にわたる日本文学・日本文化の連続性・不連続性」
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 『草叢の迷宮——泉鏡花の文様の想像力』	単	2014年07月	ナカニシヤ出版	本書は、泉鏡花の代表作のひとつである長編小説『草迷宮』（明41）と、以後に書かれたいくつかの鏡花作品をめぐる論考をまとめたものである。冒頭の序論では、江戸の意匠である「武蔵野」が『草迷宮』を読み解く鍵の文様であることを述べ、第Ⅰ部では、『草迷宮』の豊穠な魅力、複雑な構造、そこに伺われる鏡花の方法意識を明らかにするべく、それぞれ、言葉としての「草」、「意匠」としての草、そして「草」の文化史という三つの異なる観点から作品分析を行う。第Ⅱ部、第Ⅲ部では、この『草迷宮』で行われた試みの展開の様子を、鏡花の作品としては未だ俎上に載せられることの少ない昭和初期の作品群を素材に能楽の方法などに注目しつつ検証する。終章では『草迷宮』から『白花の朝顔』（昭7）までの変遷を追いつつ、このような鏡花の方法を〈文様の想像力〉と名づけて全体を総括する。
2. 『江戸川乱歩と名張』（皇學館大学講演叢書第一四三輯）	単	2012年12月	皇學館大学出版部	江戸川乱歩が生を受けた三重県名張市市内には「幻影城」「うつし世は夢」という乱歩自身の文字が刻まれた生誕の碑がある。わずかに二歳までしか滞在しなかったとはいえ、この地で生まれた乱歩が描く作品世界と、この「路地」の多い町の持つ趣とは、不思議に響きあっているようにも思える。そこで、町のあちこちにある「路地」とそこに潜む「幻影」とを鍵として、乱歩の妖しくも美しい作品世界を読み解いていった。（皇學館大学公開講座の講演内容をまとめ、加筆したもの）
3. 『泉鏡花の文学と伊勢——光と闇の古市——』（皇學館大学講演叢書第一四四輯）	単	2012年12月	皇學館大学出版部	伊勢を愛した文人の一人、泉鏡花。その作品の中から、伊勢を舞台にした「歌行燈」「伊勢之巻」「無憂樹」を取り上げ、それぞれの中で印象的に描かれる「古市」の空間を考える。伊勢、古市という土地の歴史的な背景や地理感覚を、作家鏡花自身の人生や故郷への思いとも重ねつつ、その独自の幻想物語が展開していく様子を解説

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
4.『兵庫近代文学事典』（日本近代文学会関西支部編）	共	2011年11月	和泉書院	する。（皇學館大学公開講座の講演内容をまとめ、加筆したもの）日本近代文学会関西支部の事業として継続して刊行している地方別文学事典編集の一環として、兵庫県の文学事典を企画、編集委員として編集する作業にも携わったもの。執筆者（多数のため編集委員兼務者のみ挙げる）：大橋毅彦、杣谷英紀、田口道昭、西尾宣明、信時哲郎、三品理絵 担当項目：「足立巻一」「猪野謙二」「上田真」「荻野アンナ」「北尾鎌之助」「北原文雄」「北康利」「志賀重昂」「庄野英二」「妹尾河童」「武田信明」「中井久夫」「日本橋ヨヲコ」「野口武彦」「信原潤一郎」「野溝七生子」「宮城道雄」「宮本輝」「森はな」 執筆者：半田美永、高橋昌子、水川布美子、岡本和宜、三品理絵、濱川勝彦、衣斐弘行、竹添敦子、中川智寛、高津祐典、天野知幸、原卓史、鈴木昌司 担当箇所：「丹羽文雄のミニマリズム―戦後の丹羽作品とヘミングウェイ」 本稿では、第二次大戦後に丹羽文雄がヘミングウェイに寄せた共鳴を契機として、「誰がために鐘は鳴る」と戦後丹羽作品を対照させつつ考察する。その検討から明らかになる二つの手法――書く対象の行為と台詞をミニマルな断片の集積として示す方法と、視点的人物の相対化・複数化により作品世界を解体された断片の集積として新たに呈示する方法――はいずれも、一つの過渡期にあった当時の丹羽の問題意識とかかわる、丹羽流ミニマル・リアリズムの試みとして捉えうるのである。 掲載頁：99-114頁
5.『丹羽文雄と田村泰次郎』（濱川勝彦、半田美永編）	共	2006年10月	学術出版会	執筆者：エドゥアルド・クロッペンシュタイン、小田川大典、鈴木貞美、黒古一夫、阿毛久芳、孫才喜、十重田裕一、渡辺知也、三品理絵、稲賀繁美、林洋子、坪井秀人、長木誠司、塚原康子 担当箇所：「一九二〇―一九七〇年における日本文学の能楽受容」日本文学が「近代化」のプロセスの中で忘却した詩的言語の世界を想起するための手がかりを能楽に見出そうという動向を、十五年戦争を挟む五十年間の日本文学の中に探る。この動向が典型的に現れた三人の作家、泉鏡花、稲垣足穂、三島由紀夫に着目し、彼らの作品の考察を通して、この時期の能楽の変容を背景に生まれた文学活動のひとつの系譜として検証していくことを試みた。掲載頁：257-296頁
6.『日本文化の連続性と非連続性』（E・クロッペンシュタイン、鈴木貞美編）	共	2005年11月	勉誠出版	執筆者：秋山稔、早川美由紀、穴倉玉日、清水潤、杳由美、森田健治、三品理絵、小柳滋子、市川祥子、種田和加子 担当箇所：「問いつめ、引き裂く花―泉鏡花『菊あはせ』論」『菊あはせ』（昭7）で、独特の緊張感を喚起する「菊」を、ひたすら「訊く」強迫観念の表象として捉え、主人公に「母／おんな」の二者択一を問う「菊持つ女」の誘惑が、追憶と現在及び理想と現実との競合を象徴していること、謡曲『菊慈童』を典拠とする「菊」に託された退行夢想と老醜の自覚との歪な亀裂を導くことを、鏡花自身の老いへの思いの投影の指摘も含め論証。掲載頁：121-138頁
7.『論集 昭和期の泉鏡花』（泉鏡花研究会編）	共	2002年5月	おうふう	執筆者：鎌田廣己、三品理絵、藤原耕作、若林敦、森本隆子、北川扶生子、武田信明、永吉雅夫、山本和明、真銅正宏、劉建輝、常吉由樹子、田中康二、朴鐘祐、出口逸平、高桑法子 担当箇所：「『草迷宮』における歌絵の趣向―〈見立て武蔵野〉の世界―」 絵画を思わせるような美しい視覚的イメージを喚起する作品である鏡花の『草迷宮』（明41）について、冒頭の「杜若咲く八つ橋」と「月の武蔵野」という形式的な表現に着目、これらが江戸時代に好んで用いられた伝統的な意匠であることをもとに同作品を検討、鏡花の意図が、実は同作品そのものを一枚の「見立て絵」となすことであったことを指摘。掲載頁：28-46頁
8.『近世と近代の通廊 ―十九世紀日本の文学』	共	2001年02月	双文社出版	
2 学位論文				
1.「泉鏡花『草迷宮』論―鏡花文学における植物誌的想像力の内実と背景をめぐって―」（博士論文）	単	2001年02月	神戸大学	本稿は、泉鏡花の小説『草迷宮』（明41）に関する研究である。タイトルを構成する「迷宮」に比べ、ややこれまで等閑視されてきた感のある「草」に着目しつつ、三部構成で、「草」をめぐる三つの観点から『草迷宮』を考察する試みである。第一部は「ことば」としての「草」、第二部は「視覚的なイメージ」としての「草」、最後の第三部は「草」の「文化史」に、着目したアプローチということになる。第一部、第二部で『草迷宮』について多面的な作品論的

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
2.「泉鏡花論——そのエネルギーの噴出と安定化についての一考察——」（修士論文）	単	1992年03月	神戸大学	分析を試みた後、第三部ではそれらの複眼的なアプローチを統合すべく、『草迷宮』を広い意味での文化史的な文脈に位置づけ、その中で鏡花が同作作品において行った文学的な実験=新たな創作方法の創出の意義を明らかにすることを試みている。 本稿では、鏡花の初期小説、連作「誓之巻」及び「黒猫」に登場する「富の市」の造形に着目し、従来の鏡花研究の中では寧ろ軽視されてきた、初期の所謂「観念小説」期の作品の内在的な分析を通して、初期において鏡花が＜報われぬ男＞という主題、すなわち反社会的なまでにグロテスクに肥大した情念を抱え込んだ男性という主題に、執拗なまでに取り組んだことを明らかにした。また、こうした初期特有の＜報われぬ男＞の人物造形が、鏡花作品全体を貫く＜亡母憧憬＞の主題と密接な内的連関をもっていること、初期から中期の作風変化の内実に関わっていることを論証した。
3 学術論文				
1.「『卵塔場の天女』再読——泉鏡花の能楽受容——」	単	2009年09月	「国文学 解釈と鑑賞」第74巻9号（ぎょうせい）掲載頁：160-167頁	「卵塔場の天女」の謡曲モチーフのうち、特に「羽衣」と「歌占」との二作品との関連に注目して解説し、本作における「能楽小説」であることと「帰郷小説」であることとの有機的関連を考察した。「羽衣」の物語が導く主人公の苦悩と、詞章が導く魚市場の光景とが、様々な「観念連合」や可視的イメージに移し替えられた縁語的世界とともに展開し、さらには「羽衣」世界と一対になった「歌占」の世界とも重なって、一見リアルな私小説の趣を呈しつつ、実は能を存分に生かした解体と再生、自己探求の物語を多層的に実現していることを論証した。
2.「翻案作家としての長谷川天溪——『鏡世界』と『人魚』」	単	2007年07月	「国文論叢」38号、神戸大学国語国文学会 掲載頁：57-66頁	長谷川天溪の『鏡世界』は、キャロルの『鏡の国のアリス』の本邦初訳であるが、抄訳かつ独自の改変がかなり施されていることから、その評価は必ずしも芳しくない。しかし『鏡世界』は、単発の企画ではなく、発表誌『少年世界』で展開されていた『世界お伽話』紹介の一環であり、天溪の仕事としてもこの前年に連載した『人魚』に続く第二弾であったという事情を鑑みるなら、それを単なる無理解や強引な日本化として片付けるのではなく、天溪側からの再検討も行われてしかるべきだろう。本稿では『鏡世界』『人魚』の二作品を俎上に載せ、『鏡世界』の改変部分を『人魚』の作品世界の特徴と照らし合わせることで、同時代の動向とも呼応する、天溪の目指したお伽噺のありようを検討し、天溪アリスが伝えたものとは何だったのかについて考察を試みた。
3.「『紫大納言』—悪戦苦闘としての文学」	単	2006年11月	「国文学 解釈と鑑賞」第71巻11号（至文堂）掲載頁：75-80頁	本稿は、坂口安吾の小説『紫大納言』について、初出版(昭14)と改稿版(昭16)の異同を、登場人物の造型、関係、及び作品における色彩描写の三点から検討し、静謐な「諦観」の物語から過剰さに満ちた「悪戦苦闘」の物語への転回を見出したうえで、そこに、単なる加筆修正ということにとどまらない安吾の作家としての一つの転回——歴史的現実に対して、傍観者の立場でなく、その現実の中で悪戦苦闘する無定型な人間の立場をあえて選択しようとする安吾の決意——を読み取ろうとするものである。
4.「泉鏡花と近世絵画の意匠——文様の想像力の形成と展開——」	単	2004年03月	「比較文学」46号、日本比較文学会 掲載頁：7-19頁	明治後期以降の鏡花文学における近世絵画の意匠の受容について考察。まず『草迷宮』を、そこに登場する二つの文様を通じて分析、同時代的背景の中で、方法論として「文様の想像力」を確立したことを論証。次に後期作品の「白い丸いもの」イメージを検討し、光琳模様はじめ多様な連想を導入する意匠としての機能を見、「文様の想像力」の展開を検証。
5.「鏡花文学における自然と意匠の背景——『草迷宮』の同時代的文脈をめぐって——」	単	2001年03月	「紀要」28号、神戸大学文学部 掲載頁：1-79頁	『草迷宮』（明41）を文化史的背景に着目して考察。まず初版本の岡田三郎助の口絵を検討、同作品が共有していた同時代の意匠にある神秘的な自然主義の傾向を指摘。次に同時代の自然探求流行の風潮を検討、雑誌「園芸文庫」を刊行した前田曙山と鏡花との交流の考察から、植物の形象と言葉とが作り出す象徴的な『草迷宮』の方法を検証、自然と意匠の双方に関わる植物誌的想像力の展開過程を明らかにする。
6.「市場のブリコラージュ——泉鏡花の『古路』試論——」	単	2000年03月	『五十周年記念論集』（紀要27）、神戸大学文学部	これまで研究史上では取りあげられることのなかった、鏡花の昭和期の作品である『古路』について、作中に登場する「市場」の機能を考察。鏡花文学における「市場」が、「もの」それも草木虫魚を

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7. 「『化銀杏』についての一考察——同時代の衛生思想との関連において——」	単	1999年10月	「日本近代文学」61集、日本近代文学会 掲載頁：16-31頁	主とした食材の集まりとして捉えられ、身近な異世界の立ち上がるブリコラージュ（＝解体と再生）の場として機能することを論証。これは、後期鏡花のマニエリスム的な手法を考えるための準備作業の一貫である。 薄倅の女「貞」の物語とされて来た『化銀杏』（明29）を「貞」の夫「時彦」の側に着目して読み直し、その人物造型を同時代の衛生思想との関わりという観点から考察。初期作品頻出人物造型「報われぬ男」の上に「虚弱な衛生家」の造型を重ねて創出された「時彦」の、過剰な愛と衛生的な視線が、逆説的に作中に憎悪や病を顕在化させ、結果的に鏡花文学の「闇の女」の幻想創出に大きな役割を果たすことを論証。
8. 「追いつめられる妻、囲い込まれる妻——泉鏡花『化銀杏』とバルザック『オノリーヌ』——」	単	1999年03月	「比較文学」41号、日本比較文学会 掲載頁：79-92頁	『化銀杏』批判に際して森鷗外が引き合いに出したバルザックの小説の中から、『化銀杏』と共通するテーマ、互いに全く無理解な男女の凄まじい相克を描く『オノリーヌ』との比較を通して、時代の転換期を生きた東西の知識人男性の造形を論じた。妻たちを追いつめ、囲い込んでいく彼らの理性とはいわば彼らの弱さを強引に隠蔽するためのよすがであり、女たちは、理性を盲信する彼ら自身の中にある非理性的な情念を投影させられている。
9. 「泉鏡花と打擲する女——『貧民倶楽部』から『湯女の魂』へ——」	単	1998年03月	「阪神近代文学研究」2号、阪神近代文学研究会 掲載頁：1-19頁	『貧民倶楽部』を、女主人公お丹の〈打擲する女〉という側面に着目し、中期の作品『湯女の魂』との比較を通して、その「嗜虐的暴力性」＝破壊性を考察。共に〈打擲する女〉の構想を持つが、後者の打擲は死による救済と異界での平穏を表象するのに、前者でのそれは死から救うことで却って破滅させる。お丹は、苛酷な現実を宣告する超越的制裁者として描かれており、初期鏡花作品に一貫してみられた生と死の拮抗の表象であったことを論証。
10. 「の機能をめぐって——『夜行巡査』論」	単	1997年11月	「国文学研究ノート」32号、神戸大学「研究ノートの会」掲載頁：19-33頁	『夜行巡査』を、主人公八田の〈夜警人〉としての〈眼〉の機能という観点から考察。クリアな〈眼〉を持つ警官八田の、第三者として実態への関与を拒む位相は、先行作品『鐘声夜半録』の豊島に原型を持つ。八田と対照的な老人との関係を通じ〈夜警人〉が当事者としての主人公と第三者的な語り手との位相の間を柔軟に揺れ動き、鏡花の語りの傾向とも関わる特殊な存在であると論証。
11. 「〈草叢〉のつくり出すもの——『草迷宮』試論——」	単	1995年03月	「国文学研究ノート」29号、神戸大学「研究ノートの会」掲載頁：45-60頁	研究史上どちらかといえば等閑視されている『草迷宮』の「草」に着目し、タイトルに冠せられたこの作品中で「草」が具体的にはどのように機能しているかを作品論として検証。その中で、歌物語や習俗伝承などを背景に、鏡花が「草」の多義性や属性をうまく援用しながら幻想世界を作り上げていることを物語に沿って指摘、「草」は二次的な形容語ではなく、「迷宮」とまさに等価的かつ相互補完的な存在であると論証。
12. 「亡母憧憬を導くもの——『誓之巻』の〈第二の夢〉——」	単	1994年03月	「国文学研究ノート」28号、神戸大学「研究ノートの会」掲載頁：1-19頁	連作『誓之巻』の主人公新次が作中で見る夢の分析を通して鏡花特有の亡母憧憬のテーマと、富の市という心象を通じて描かれたグロテスクな欲望というテーマとの相互補完的な関係を論証。すなわち、新次の夢においては、一見拮抗している欲望充足を志向する力（グロテスクな欲望）と、情念そのものから幼年時の追憶へ逃れようとする力（亡母憧憬）とは、実は後者が前者に否定的充足の場である「母」の空間を提供していると論証。
13. 「『富の市』の主題的連続性と変容——『黒猫』から『誓之巻』へ——」	単	1993年03月	「国文論叢」20号、神戸大学国語国文学会 掲載頁：25-39頁	鏡花の『黒猫』（明治28）及び連作『誓之巻』（明治29～30）に登場する「富の市」を考察。初期頻出の「報われぬ男」（強烈な思い故反社会的存在となる）造型の一たる富の市は、『黒猫』では妖怪じみた欲望の権化として描かれるが『誓之巻』では主人公新次に自らの内なる欲望を自覚させる心象となる。幼年時代や亡母憧憬という鏡花特有のテーマがこの欲望の否定的充足の不可欠条件として最初の導入を見ることを指摘。
14. 「『桜の森の満開の下』の男と女」	単	1991年09月	「国文学研究ノート」26号、神戸大学「研究ノートの会」掲載頁：41-54頁	坂口安吾の『桜の森の満開の下』で、「桜の森」と同様、観念的な美の象徴として捉えられて来た「女」は、フェティッシュな欲望と執着に満ちた「都」の余剰・奢侈・「晴」の世界の生々しい具象化として、「山」の素朴・本能・「褻」の世界を体現する「男」と対置されていること、「桜の森」とは、「女」の欲望や執着と「男」の畏怖・憧憬とを等価のものとして包括し解体する「トポス＝場」として捉えられることを論証。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1.・「エリスからイデスへ 鷗外と荷風」	単	2010年03月	三重近代文学研究会（於三重大学） *シンポジウム「舞姫120年を記念して」パネラーとして報告。	鷗外の『舞姫』（明23）から十六年後、アメリカへ渡った永井荷風は、異国の場末で出会った酌婦イデスとの関わりを『西遊日誌抄』（明38～40）に詳細に書いている。眷属の地であるフランス行きとイデスとの別れの間で心揺れる荷風の心情も、一人称語りの文体も、きわめて『舞姫』の太田豊太郎のそれに酷似しており、公開の日記として書かれた『西遊日誌抄』でイデスとの関係を描くとき、荷風が『舞姫』を強く意識していたのではないかということが窺える。二作の比較を中心に、異国人女性と渡航した日本人青年との恋を描く近代文学の変遷について考える。
2.・日本近代文学展開の一側面―ある能楽受容の系譜	単	2008年08月	三重県中学校国語教育研究会（於皇學館大学）	「詩」とは何か、ただの「説明」ではない、想像力に満ちた豊かな「ことば」とは何か。日本文学が「近代化」のプロセスの中で忘却した詩的言語の世界を想起し、とり戻すための手がかりを「能楽」に見出そうとする動向を、三島由紀夫・稲垣足穂・泉鏡花という三人の作家の文学的営為の中に見出す。当時きわめて古典的であると同時にきわめて前衛的な芸術として注目された能楽を、ユニークな私たちで作品に取り込んだ彼らの仕事について近代のひとつの系譜として検証しつつ、「ことば」の可能性とは何かを考える。
3.「怪異としての文様―泉鏡花「菊あはせ」解説」	単	2007年06月	日本比較文学会全国大会（於北海道大学） *シンポジウム「鏡花文学の怪異のディスコース」のパネラーとして報告。	明治後期以後、鏡花が戦略的に練り上げ、その後の作品でさらに深化・展開させていった独自の創作方法の特質を、本報告では、近世絵画と能楽という二つの伝統との関連において考察する。具体的な素材として、独特の緊迫感に満ちた悪夢的幻想を描く「菊あはせ」（昭7）の分析を行う。同作品の解説を通じて、伝統の継承が結果的に豊穡な文学表現の刷新を可能にしていくなかに鏡花文学の方法的特質＝文様の想像力を明らかにしていく。
2. 学会発表				
1.「泉鏡花の食材幻想 ―「続 龍胆と撫子」から―」	単	2013年07月	泉鏡花研究会大会（於昭和女子大学）	本報告は「龍胆と撫子」（大11～12）の「続篇」を正編との関わりでなく鏡花の作品史の中で改めて捉え直す試みである。その際「続篇」における「菫菫怨霊」のエピソードに着目する。主人公の彫刻師雛吉によって、木片やありあわせの野菜から彫られた裸女たちは、作中の男たちの性的欲望からヒロイン三葉子を守るための一種の呪具であるが、同時にそれは雛吉自身の三葉子への欲望や芸術上の苦悩の象徴でもある。己の作り続ける野菜裸女の横溢によって雛吉が混乱するとき、おぞましい擬きとしての菫菫裸女が出現する。それらは「食材」であることで贅となり糧となり、死と再生の具現ともなる（「菫菫怨霊」はまさに「食べる」ことで退散させられる）。「続篇」では、正編で描かれきれない雛吉の欲望や苦悩がこの食材幻想によって強調されている。
2.「〈魔王〉との邂逅 ―「蓬莱曲」と「草迷宮」―」	単	2012年06月	北村透谷研究会（於四日市市立博物館）	本発表は、北村透谷の「蓬莱曲」と泉鏡花の「草迷宮」とを、作中に於ける魔王との邂逅に着目して読み比べていく。ふたつの物語では、いずれも、異界へさまよい込んだ青年が「魔王」なる存在と邂逅するが、透谷は「魔王」に、秩序を打ち壊す反社会的な衝動（それは自分の内なるものである）を見、それと問答し対決する。一方鏡花でのそれは、「永遠に追い続けるべきもの」＝ことば＝芸術作品への探索の旅を続ける主人公に、様々な試練を与え、見守る父性であり師匠であるような存在となっている。対照的な「魔王との邂逅」は近代において多く超自然的なものを描いた二作家の各々の文学の特性を考えていく手がかりともなるものである。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1.「泉鏡花の中期作品と近世絵画の様式及び自然観との関わり	単	2000年4月～2001年度	日本学術振興会科学研究費 奨励研究（A）研究機	明治・大正・昭和にわたって活躍した泉鏡花の文学は、絵画的、装飾的と評されながら、具体的に絵画との関わりから考証されることは、草双紙等との関わり以外ではこれまでほとんどなかった。中期

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
			関・神戸大学	以降の作品において鏡花は、日本の伝統的な美意識や自然観を踏まえつつ、当時隆盛を極めていた自然主義に対抗するための創作方法を、かなり意識的に練っていたと考えられるが、本研究に於いては、このような鏡花の創作方法を検証するに当たり、明治三十年代に西欧のデコラティヴアート復権の動きと相俟って日本内外で改めて注目された、琳派絵画の装飾的趣向との関わりを考えていき、鏡花の創作活動を支える美意識のありようを、より具体的に明らかにするものである。
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		